木津村長講話

農村經營談

327
666

始

327
666

木津村長講話

農村經營談

序言

一、我國ニ自治制ヲ施行セラレテ以來已ニ二十余年、地方改良ノ聲一般ニ喧傳セラルルニ至リシヨリ約十年、其ノ間地方開發ノ爲各地ニ種々ノ施設起リ、地方自治ノ基礎今ヤ漸ク固カラムトスルノ傾向アリト雖、各地實際ノ情形ニ見ルトキハ、猶未ダ自治ノ觀念一般ニ幼稚ニシテ、事業振ハス治績擧ラサルヲ感セサルヲ得ス、苟モ皇國ノ臣民タルモノ邦家ノ爲一層勵精努力セサルヘカラサルナリ。

一、素ヨリ全國多數ノ町村中ニハ克ク自治制ノ運用ヲ爲シ其ノ治績ヲ擧ケ居ルモノ又ハ將ニ擧ケムトシツヽアルモノ、乃優良町村トシテ數ヘ得ヘキモノ多々アルヘシト雖、眞ニ優良ト稱スヘキモノ乃チ完全ニ自治制ヲ活用シ、充分ニ其ノ効果ヲ奏シツヽアル町村果シテ幾許乎アル。全國一万二千有余ノ町村中、今日迄ニ模範町村トシテ內務省ヨリ選奬セラレタルモノ僅ニ七十有余ニ過キスト聞ク、豈ニ寒心スヘキ現狀ナラサルカ、地方團体ノ開發町村自治ノ改善亦前途遼遠ナリト云フヘキナリ。

帝國圖書館藏
大正 3. 10. 27 内交

一、三重縣阿山郡玉瀧村ハ模範村トシテ夙ニ世ニ知ラレタル優良村ナリ、實ニ仝村ハ日本三模範村ノ一トシテ世ニ推稱セラレ居ル村ナリ而シテ仝村ノ治績ハ今ヤ已ニ種々ノ方法ニ依リ世ニ紹介セラレ居レリト雖、仝村ヲシテ今日アラシメタル仝村經營者ノ實驗談ニ至リテハ吾人之ヲ耳ニスルコト極メテ稀ナリ、是レ仝村經營者ハ自ラ謙遜シテ敢テ之ヲ口ニスルコトヲ好マサルト又本郡ノ如キ遠隔ノ地ニ在ルモノハ其ノ之ヲ見聞スル機會極メテ稀ナレハナリ。

一、昨大正二年二月本郡第一回地方改良講演會ヲ茂原町ニ開催スルヤ、平素用務多キ仝村々長木津慶治郎君ハ特ニ本郡ノ請ヲ容レ、時恰モ年度末ニ際セムトスル時ナルニ不拘態々遠隔ノ地ニ來郡セラレ其ノ實驗談ヲ試ミラレタリ。

一、當時木津村長ハ「農村經營ノ事例」テウ題ノ下ニ、實ニ二日間ニ亘リイト熱心ニイト懇切ニ農村經營談ヲ試ミラレタリ、茲ニ世ニ公ニセムトスル「農村經營」乃是レナリ。

一、本書ハ當時同講演會ニ來會セラレタル郡內有志又ハ差支ノ爲來會スルヲ得サリシ一般人士ノ懇請ニ依リ、特ニ木津村長ノ校閲ヲ經、茲ニ出版スルコトヽナシタルモノナリ、當時仝氏ノ講演如何ニ本郡有志ヲ刺激シ感動ヲ與ヘタルカハ、此一事ニ依リ之ヲ窺知スルコトヲ得ヘシ、茲ニ本書ヲ出版スルニ當リ其ノ之ヲ公ニスル所以ヲ述ヘ以テ序ニ換ユ。

大正三年二月

長生郡長　久保三郎

3. 10. 27
内交

農村經營の事例

三重縣阿山郡玉瀧村長　木津慶治郎君

私は唯今御紹介を得ました三重縣の玉瀧村長でございます、此度御郡に於かせられまして地方改良諸演會を御催しになるに就て、私に參つて一塲の實驗談を試みよと云ふに御照會を受けたのでございます、然るに私共は子供上がりから自分の村の役塲に居りまして唯村の行政の一部を見習ひ、先輩の指揮の下に立つて、自分の村の仕事を聊さかやつて居りまするばかりでありまして、何等の素養もありませず、固より見聞もありませぬ斯る晴れの席に於て諸君に御話を申上げるなどと云ふことは、誠に烏滸がましき次第であります、又年中殆と自分の村の仕事に追はれて居りまして、何等の研究も出來ませず、斯う云ふ所へ一体顔を出す柄では無いのであります、然るに唯今此御郡に御居でになりまする久保郡長殿は、私の方の縣に數年御居でになりまして、其時分に色々御指導を頂だきました縁故もあります、又御郡には豫て私共が吾が農界の偉人として、最も敬意を拂ふて居りまする有名なる加納子爵閣下が一の宮の町長として、あの御高齢を御厭ひなく町村自治の爲めに御奮勵になつて居る有名なる御郡下でありまするで、此の御郡の土地を履みまして、一郡の狀況を拜見し、又本郡長殿の折角の御奄招に顔を出さぬと云ふことは如何かと考へまして本日玆に出ました次第であります、さう云

ふ次第でありまするで總ての講演會、講話會などに於て、彼の學士或は大家の方が御話になるやうな有益な御話、或は趣味ある御話は一切出來ませぬ、唯二十餘年間、伊賀の寒村に於きまして其の土地相應に經營いたしました所の事績に就て御話を申上げまして、諸君の御參考に供したいと思ふて居るのであります、固より土地も大分に隔つて居りまするし、人情其の他各々違つて居りまするし、全く御參考にならぬかも分らぬのでありますが、私が玆に諸君に御話を申上げやうと思ひまするのは、我々の住んで居りまする地方の如き最も寒村僻地でも、勤勞と云ふ事とそれから共同一致と云ふことが實際に行はれまするると、多少其町村に目鼻が付いて來ると云ふ實驗談であります、郡長の御開會の御趣旨にありました如く、我邦は三十七八年の戰役の餘光に依りまして、世界の一等國に列することが出來ましたが、此世界の一等國なるものが彼の世界の列强、本當に一等國と云はれるやうに國民の素質、或は資力、其他總ての點に於て世界の一等國として耻かしく無いだけの條件を備へて居るかと申しまするると、武勇に依つて得たる一等國であつて、其他のものは未だ備はつて居らぬと云ふやうな事になりて居る趣きであります、唯武勇のみに依つて得たる一等國を、此儘にして置いて永く一等國の光榮を維持することか出來るであらうか、是は今局に當る者の大に心配をされて居る所の事柄であります、私は唯今申上げた如く極く此の寒村僻地が共同一致、勤儉力行に依つて聊さか恢復を致して、尙は將來に多少發展をする見込を有づて居る所の我が村の現況に付いて御話を申上げて見やうと思ふ

のであります。

近頃研究の爲めに各方面の自治團体を能く拜見に出まするですが、其の當局者に御出會ひをして色色御話をしまするると、隨分土地は立派な所であつて、さうして割合に其地方の發展せぬ所もあります或る所へ行つて村の事情を聞きまするると、能く農村などで言はれる言葉の中には、自分の方では非常に力を入れて居るけれども、農村として所謂農村の生命としなければならぬ所の土地が少ないから、如何に勤勉努力して見ても村政は發展せぬと云ふ事を言はれるやうな所もあるのであります、又土地は澤山あるがどうも瘦地であつて如何に力を入れて見ても根つから發達をせぬと云ふやうな事を言はれる所もあります、併し其の現在の土地が瘦せてあるとか、或は農村の生命としなければならぬ土地が少ない爲に發展をせぬと言はれる言葉に道理があるのか、どうでありませうか、瘦せてある土地に一つの精神を加へて參りまするると、其地が肥へて參ります、又農村として土地が不足である、土地が不足になれば各々其の所を求めて或は工業を勵み、或は副業を勵み、或は勞役をやります、其方法に依つて相當進むのであります、現に諸君も御存じである廣島縣の廣村を御覽になれば能く分るのであります、廣村は貳千九百戸もある大きな村でありまして、農業の外に色々の副業がありますが、掻摘んで申せば矢張り方法であります、其の農村の生命とも云ふ土地に一戸當りにどれだけあるかと云ふと漸くにして二反六畝步位ゐしかないのであります、其他は何に依つて補つて居るかと云ひまするると

其土地を能く利用し、山も能く利用し、漁業もやる、それから血氣盛んの者は色々の工業を學びまして日本の全國を稼いで廻る、女は其の留守宅を守つて子供を育てる傍ら魚網を編む、或は呉市に野菜其他の生産品を鬻ぐ、又毎日幾百とも算へる程の職工勞役者は、彼の呉の工廠に通ひましてあちらから澤山の金を取つて來る、さう云ふ風にして今の廣村は富裕に出來たのであります、廣村を見た人は往々にして廣村の今日天下に名を爲した理由は呉と云ふ海軍の工廠が出來ました、我邦有數の軍港が出來て、あれが爲に金を儲けた、他では眞似の出來ぬことであると云ふやうな報告をする者がありますが、それならば呉の附近の村々は皆良くならなければならぬ筈であります、呉市と直ぐ地續きになつて居ります阿賀と云ふ町がありますが、其の阿賀を越へて廣村であります、然るに阿賀の方は一向發達をしませぬ、一つ飛んで先きの廣村が發達して居る、斯う云ふやうな事になつて居る点から考へましても、是は詐り其の住民の勤勞及び是を導く所の先輩の人の指導如何に依つて町村自治の發達をすると、せぬとに岐れるのではないかと思ふのであります。

廣村の話は別と致しまして、今後は私が自分の村の御話を申上げるのば、到底廣村などの御話と比例にはなりませぬが、是は極く寒村で、伊賀と申せば既に日本の國々の中では餘ほど山僻の惡ひ所であります、其の山僻の最も詰らぬ伊賀の國の中の最も寒村である我が玉瀧村が、幾多の災危に遭遇し幾多の苦勢を爲して稍々寒村に目鼻が付いた實蹟を申上げるのであります、私の村が非常に難村であつたものが、稍々目鼻の付いたる例を御話申上げるに就いては先づ以て其地勢から御話を申さなければ御分りにならないと思ふのであります、私の村は三重縣では一番西北の端になつて居りまして、御地の如く斯く云ふ押開いた所謂平坦な、殊に交通機關の能く整ふて居りまする、斯う云ふ結構な土地とは全く違つて居るのであります、どちらへ出まするにも皆山を以て圍んで居りまして、今より二十四五年前までは車は一切通らないのであります、土地の物産を運び出しまするにも、皆牛馬の脊を借りるより他に途は無かつたのであります、それが明治二十一年頃からボツ／＼道路の改修を始めまして、車が通るだけになつたのであります、東西南北共に車の通るだけになりましたが、停車場へはどちらへ出ましても二里半位ゐあるのであります、二里半ばかり出ませぬと鉄道の便は備はつて居らぬそれで山また山に圍まれた山懐ろに人家か点在してあります、唯今は五百四十三戸、三千二百人の現住民で一村を成して居るのであります、斯く云ふ山の中でありまするで無論水産の利などはございませぬ、御郡の御話を承つて見ますると、沿海には餘ほど水産の收入もありまする趣きでありますが、私共の方は山懐ろの農村であつて、さう云ふものは一切無いのであります、殊に先刻も申上げた如く農村としての土地が澤山あるかと申しまするど、土地は甚だ不足であります、五百四十三戸の農民が有する所の土地は田畑を通じて四百四十一町歩であります、其内に田は三百七十六町歩に、畑が六十五町歩でありまするで、田畑を通じまして、漸く一戸當りが八反歩余になるのであります、而して他

に何等の收入は無いのでありますから、農村としては餘ほど瘦せて居る、比較的天の惠みの薄いやり惡くい塲所であると云ふことがお分りにならうと思います、而して此農村を圍んで居りまする所の山はどれだけあるかと申しまするど、反別で申しまするど七百七十四町歩であります、其の反別ばかりを申して居りまするど相當の財產でありますが、此山は良材を產出する所の山では無いのでありますす杉を植へて育てまするに、長い年數を經て漸く大きな木になりますが黑杉、眞つ黑な杉で用材にはならぬのであります、檜を植へましても根から枝が出まして節ばかりあつて、立派な建築に適するやうな良材は出來ませぬので、七百七十四町歩の山は之れ迄全く松雜木の天然林であります、近頃森林業の思想が進んで參りまして、天然林では成木が手間取ると云ふので、伐りまするど跡へ松、櫟、其他の苗木を植付けることになりました從つて是から先きは段々人工造林になりますが、是までは天然林であります、其の天然林から僅かに炭、薪それから松茸ぞう茸、香茸位ゐのものが產出たしまして、幾分それで住民の生計を助けるのでありますが、重もなるものは矢張り三百七十六町歩の田と、それから六十五町歩の畑とで、是から生產する所の農產物の收入に依つて生計を立てなければならぬのであります、而已ならず此の所謂農村の生命とする所の土地が、能く私用の出來る結構な土地であるかと申しまするど、大變な厄介な土地であります、曰く付きの土地であります、此の玉瀧村と云ふのは部落が三つに別れて居ますので、其別れて居りまする二つの部落即ち大字は少しも砂氣、石氣の無い

極く强性な粘土質であつて常に、旱魃を憂へる所である、又一つの大字は砂地の瘦地でありまして、是は二毛作になつて居りますが、其方は旱魃を憂ひない代りに、非常に水害のある塲所でありゐす、先般千葉縣の地主團体の方が大勢御出でになりまして、其時分に一番不審を起されたのは、玉瀧村は農業を以て立つて居る所の村である、定めて其田地は立派なものであらうと云ふやうに考へて御出でになりましたものと見へまして、役塲の所在地の方の大字は今申上げた旱魃を憂へる方であります、總て田は水田になつて居ります、それを見られて吃驚せられたのであります、非常に耕地が立派になつて居つて盛んに二毛作の行はれる所かと思つたら收穫後も、田に水が張つてあつて一毛作しか出來ない、シテ見ると農家が怠つて居つて、裏作が出來るのにせぬのでは無いかと疑ひを起されたのでありますが、決してさうではないのであります、土質の關係から已むを得ず此の田に裏作をすることが出來ぬのであります、何故さう云ふ譯になつて居るかと申しまするど、砂氣の少しも無ひ强性の粘土質であります爲に、水を斷ちまするど乾燥して壁土の如くなります、而して田面は悉とく龜裂をして仕舞ひます、其の龜裂面から水が地の底へ潛つて行くのであります、一度田を日燒けをさせまして雨が降るど、其の龜裂面から雨が潛つて地の底へ行つて仕舞ひますから稻作をやることが出來ない、さう云ふ風に日燒けになつた後は、稻作をする爲に上土を悉とく剗退けまして、底張工事を行ふのでありますす是を床張り又は足ごわ工事と稱へます、地方に依つて各々呼び名が違つて居りまするが何れも

其の上土を一尺ばかり刎ねて、底は一面に龜裂して居ります、其の龜裂した所を槌で打固め足にて踏み均し、地の底に水の漏れて行かぬやうにして稻作をやるので有ます一度用水を切らす時は斯の如き困難な工事をせなければならぬ故にどうしても田の水を斷らすことは出來ない、随つて裏作をすることが出來ない、不幸にして旱魃の害を受けまするとさう云ふ工事をする爲めに、一反歩の復舊工事に五十人を要するのであります、耕地整理は大事業であると云ふ事を能く申しますけれども、我々の地方では一遍日燒けに遇ひますると、何百町と云ふ田は悉とくさう云ふ風に上土を刎ねて底を張らなければならぬ、耕地整理どころの話ではないもう一つ大變な仕事をしなければならぬ、さう云ふ譯で裏作は出來ませぬ、結構な田を半年余遊びをさせるのであります、今一つの大字はさう云ふ害の無い代りに村の眞ん中弦川が流れて居る、此川が迂廻屈曲して居る爲めに昔から大水が出ますると、曲つて居る角に奔流が突當つて堤防を壞します、堤防を固める、又壞す、何遍でも水が出たとなれば両岸の堤防を破壞して、殆と其川の兩岸は荒土となつて、免租に次ぐに又免租と云ふ風に、明治二十年頃から此の方、土地臺帳の沿革を見ますると殆と租税は納められぬ厄介な場所が大分あつたのであります、此二十餘年間に大きな部落の日燒けに掛る方から先に手を着けまして、遂に日燒けで困る方の塲所は總て溜池を構築し、水路を整へて今や日燒けと云ふものは殆と無くなつたのであります、田は一毛作で遊はさなければなりませぬが、一反歩に五十人の人を掛けて底張り工事をやらなければならぬ、水

止め工事をやらなければならぬと云ふ旱魃の害は此溜池の構築、水路の改良に依つて免れるやうになつたのであります、今一つ水害に苦しんで居りまする方の大字は四十年から四十一年に掛けて河身の改修をやりました、河を付け換へて仕舞ひました、七曲り八曲り、屈曲してり居した河を眞直ぐに付けまして、其後水害を免れるやうにしたのであります斯く云ふ一方には旱魃の地があり、一方には水害の地があり、昔の人は何故斯う云ふものを相當の勢力を加へて直さなかつたかと申しまするど、舊藩制の時分に於きましては斯う云ふ惡ひ所は一國の中でも少ないのであります、斯んな塲所は少ない故に日燒けの害を受けましても、又水害を受けましても、其塲合には藩は盛んに米庫を開いて救助をして呉れたのであります、日燒けがありまするど底張米、畦堀米、と云つて澤山の米を補助し、又水害があれば堤防の普請米と稱へて澤山の米を出して救助をして呉れたのであります、それで人民は日燒けがあつても、水害があつても何が藩の仕事をして居るうやに考へて、此恐るへき旱害水損に對し何等防禦の手當をせなかつたのであります、然るに廢藩と共にさう云ふ恩典は取れて仕舞ひました、旱魃があれば自分の力で是は水止めの工事もしなければならぬ、水害があつて堤防が壞れゝば其利害の關係を有する土地、大字だけの力で堤防を復舊しなければならぬ、斯う云ふ風になつて始めて眼が覺めて、如何にしたならば此災害を免れることが出來るであらうと云ふ風に、全く眼が覺めまして、溜池の方は二十年から此の方、又河の方は明治四十年から此の方、共に人工を加へて災害を根本から

免れるやうにしたのであります、マア是だけ申上げますると、玉瀧村は伊賀の國中で餘ほど土地の良くない、伊賀の國の其又一部分で最も惡い所であると云ふことが知れ分りになつたであらうと思ひますそれから村民の人氣はどんなである、人情はどんなであるかと申ますると斯る山家でありまして、時勢には餘ほど後れて居ります、其代り又惡い事も餘り移入はされぬのであります、時勢に後れる嫌ひのある代りには世の惡風潮に染まると云ふことも後れるのであります、どちらかと申しまするとボンヤリして居る少しも進取の氣象がない、今茲で私共地方の人氣がボンヤリの人氣であつたと云ふ事を證據立てる御話をして見やうと思ひます、御地から百里以上も隔つて居りますので御聽きになつた方は無からうと思ひますが、私の方の地方の人情を許した言葉がある、それはどう云ふ事であると云ふと、私の方と在鄕、近江の國とはホンの道一筋て界をなして居ります、常に私の方で、近江の千兩棒と伊賀の百兩旦那と云ふ事を申します、近江の千兩棒とはどう云ふ事であるかと云ふと、諸君は御承知の如く近江の人は勤儉力行に富んで居る、進取の氣象に富んで居る、昔し金を百兩、千兩と云ふ時代に、千兩の金は非常に貴とい時代の是は話でありますが、近江の人は千兩の金の餘裕があつても尙ほ棒を擔ひで居る、能く勤儉し能く力行する氣風であります、故に近江の千兩棒、伊賀の百兩旦那とはどう云ふ事であるかと云ひまするど、先刻も申上げた通り極く暢氣であります、小成に安んし有るに從つて遣ふと云ふことで、百兩の金が溜るとモウ旦那暮しをする、農村一番尊とばなければならぬ所の勤勞をせぬのであります、それで我々の地方では此の伊賀人と近江の人と氣象の違ふ事は今のやうに近江の千兩棒、伊賀の百兩旦那と云ふ、近江の人は進取の氣象に富み而も人間に抱負があつて、昔し千兩の金が餘裕がある家でも尙ほ棒を擔いで働いて居る、伊賀の人間は百兩の金が出來ると直ぐに旦那を極め込むと云ふ事を適切に評した言葉であります、此の百兩旦那の伊賀人が如何なる地方に多く爲つたかと申しまするど、私共の北伊賀にさう云ふ人間が多かつたのであります、伊賀で一番の都會は上野でありまして、私の方から上野へは四里あります、北伊賀の旦那衆が愈々上野へ出掛けるそれも立派な旦那衆なれば結構でありますが今の百兩旦那、僅かの金が出來ますると勤勞をせずに遊びまして、さうして身分不相應の暮しをする、上野あたりへ行つても比較的喰ひ物を、奢つて居る、商人も北伊賀の旦那衆が來たと云つて居る、農村で旦那は禁物である、是等の氣風は遂に一村を擧げて破產の運命に陷れたのであります、明治十年の頃に彼の西南の戰爭が終りまして一時人氣が好かつた事があります、其時分に私共の方で重要物產と云へば米でありますが、其米が一石十圓の値を見せた事があります、日傭賃などは十錢位ゐの時代であります、多少前から奢つて居つた所へ假に十圓と云ふ米の値段になりました爲め一層奢り出して、少し土地を有つて居る者などは下女下男を使つて自分は遊んで居る、農村であつて農業が自分の專務であるのに、其の農業をやらずに遊んで居りました人ばかりに仕事をさせて自分が手を下さぬのでありまするで、仕事に精神が這入らぬ、唯一つの物產

である所の米も、一反歩の收獲と云ふものが少ない上等の場所て貳石以内てある人任せにしてある爲めに土地は肥へぬ、それでも米が一石十圓もいたして、他の物價が廉い爲に今の旦那を極め込んで居つたので、唯さへ暢氣な人氣の所へ米が高いと云ふ一時の幸ひから景氣付いて參りました爲に一層奢侈の度が進んで參りまして遊んで暮す、遊ぶと云ふことは唯其の手を束ねて遊ぶものではありませぬ遊ぶと云ふ事に就いては何か考へなければならぬ、どう云ふ事を考へたかと云ふと、退屈たせぬやうに遊ぶ方法を考へる、農村に不似合の所の芝居、相撲煙火其他の興行或は射的、競馬とか色々な遊び仕事を考へて遊ぶ、少し上流の家になりまするど京都や大阪邊から義太夫を呼んで來まして家にて義太夫の稽古をする、總て農村には不似合な事をした、さうして遊んで居つた、上流の者がそれであるから下級の者は一層甚だしい事をやる、賭博の如きも盛んにする、兎に角一村に遊惰の風が滲み渡つた誠に惡い風が一村に滲み渉るやうになりました、それでも其時代に此の一石十圓と云ふ米の値段が續きまするど、モウ少し此の榮華の夢と云ふものも長く見られたかも分らぬのであります、米の高くなつたのは彼の西南役の平定した後、僅かの間でありまして米は直ぐに下がつて仕舞つた、所が米は下がつて財政は稍不如意になつて參りましても、付いた癖は中々直らぬのであります、惡い癖は容易に直らぬ、十圓の米が下がつて四圓になつた、それでも中々直らぬ、さうして一旦十圓の顏を見せた米である、又其内に戻るであらうと云ふ空想を描いて借金をして矢張り遊んで居つた、さう云ふ暢氣

な事をして居りまするど、天は此惰民を戒めて大なる災害が來たのであります、其大なる災害は何であるかといふと日燒け、即ち最前御話をした所の旱魃であります、明治十六年に非常な旱魃で、此時の旱魃ば私共の方の水田は無論甚だしいが、私共の方はかりではあい、他にも日燒けがありまして收穫を失なつた所が澤山あります、三重縣あたりで總ての農村が疲弊いたしたのは十年後に一時高かつた米か俄かに廉くなつたのと十六年の旱魃とが大なる原因となつたのでありあす、あの時に三重縣で有名な諸戶清六などゝいふ人が夥しい土地を買求めたのであります、愛知縣の神野金之助などが三重縣あたりへ來て澤山の土地を買求めたのは此農村疲弊の時であります、其の疲弊した時には我々の村の如きは更に激しかつた、今申したように贅澤に暮して來て、さうして十六年の大旱魃の害を受けたのでありますから、一層甚だしい、餘所の村では旱魃の害を受けましても其の年の收穫に關係するといふだけでありますが、我々の地方は先刻申上げた如く收穫に關係するだけでは無くして、一反歩の土地に水止の工事をするのに五十人の人夫を要するのでありますから、勢ひ餘所から多數の勞役者を賴んで參つて復舊工事をしなければならぬ、翌年の植付までに此工事をしなければ收穫を得ることは出來ない、此大災害が參りました爲に一層農家は生計の途を失ふやうになつたのであります、さうして其の遣り繰は何で付けるかと云ひまするど借金で付けて居る、金を借りてどうなり斯うなり遣り繰をして居つたのでありますが、村の財源が枯れて居ります爲に金が村では融通が付かぬで、皆是を村

外の資産家から高利で借りて來た、うれは滋賀縣下であります、滋賀縣人は先刻も申しましたが平素に於て貯へてありますから、一年の旱魃や米價の瀑落がありましても尙金に餘裕があります、我々地方の借金は概わ滋賀縣でかりたのであります、村内では融通が付かない、悉とく村外の資產家から借りた、利子は月一步五厘、一年に一割八分であります、百圓の金を借りて十八圓の利拂ひをしなければならぬ其利拂ひをする金は何所から求めるかと云ふと米を賣つて求めるのであります、一石四圓の米を賣つて百圓の金の利拂ひをするのには、四石五斗持つて行かねば百圓の金の利拂ひが出來ない、どうしてもそれでは農村が立行かない譯になります、利拂ひの月にはどうして凌ぎを付けるかと云ふと借金に借金を重ねてどうしても持ち堪へられない時には土地を流すのであります、抵當流れにするのであります、抵當流れにするのも惜い、金の才覺は出來ぬ、窮すれば即ち濫す、玆に於て惡い事を考へる此時代には土地建物を抵當にする、抵當權の設定をしまするのに唯今のやうに登記所は無いのでありまして、皆是は其時代の戸長役場で公証の手續をする、或る者は其一つの抵當物を以て、時の戸長を說けて、戸長と共謀して二重にも三重にも公証を造つて貰つて、村外の債權者を欺いてまでも金を才覺しやうと云ふ時代があつたのであります、それが爲め一種の疑獄を惹起し、實に村の爲めにいふべからざる惡歷史を此時代に造つたのであります、當時村民が大切な土地建物を抵當として村外の、多く滋賀縣地方の人に借りて居つた所の負債はどれ位ゐあつたかと云ふと四万千五百六十圓あつたのです唯今のやうな通貨の膨脹して居りまする、金の値打の少ない時代ならば四万千五百圓と云ふ金は何でも無いのでありますが、明治二十年頃に四万千五百六十圓と云ふ金は中々大變な借金です、それに其當時の普通利子月一分五厘を計算いたしまするど、村外の負債の爲に持出す所の利拂金が一年に七千圓以上になつて居る、又其利拂ひが出來ず段々債權者から嚴しい催促を受けて、或は訴へられて抵當流れになる所の土地も少なくないのであります、明治二十年の調べに依りまするど丁度二十町步他村の人の所有になつて仕舞つたのであります、三百七十六町步あつてすら足らぬ土地が、此時に二十町步他村の人の所有になつて六百俵と云ふ小作米を持出さなければならぬ、それから四万千五百六十圓と云ふ負債に對して七千圓以上の利子を年々村外に持出さなければならぬと云ふやうな有樣に立至りました、此儘で尙ほ數年を經過いたしたならば我が村の財政と云ふのもは根本から破壞されて、村外に拂ふ所の利子と、持出す所の小作米と、是だけで一村を擧げて破產の運命に陷ると云ふ眞に危險の塲合に迫つて仕舞つたのであります。

さうなりまするど如何に暢氣な山家の人も眼が覺めて來るのであります、もう仕方がない、どんなにしても利拂ひは出來ない、斯ふ云ふ事をして尙一兩年を過したならば、村內に殘るものはれ宮にお寺だけで他の物は皆無くなる、如何にして此衰頽した所の村を恢復し、如何にして此夥しい負債の義務を果すか、初めて目が覺めて、うれから色々の相談が始まつたのであります、さう云ふ事になります

と何れの地方でも同じ事であります、村には矢張り先輩の人がある、老人が段々心配をし始め、是はモウ何とも仕方がない、長い間暢氣に奢つて遊んで仕舞つた罰が當つたのである、茲で一つ大改革をやつてさうして嚴重な勤儉規約を布き、大勢の力で總ての奢りを止まさう、又遊ばないと云ふ事にするより外に道は無からうと云ふので、嚴重の規約が明治二十年に始めて出來たのであります、嚴重の規約とは如何なるものであるかと云ひますると、村内に於て演劇、相撲、煙火の放揚、其他諸興行は一切ならぬ、又各自の家庭に於て遊藝人を引入れて色々の遊藝をして、農村に不似合なる遊び方をすると云ふことは嚴禁である、村の入口に遊藝稼人入るべからずと云ふ札を立つた、それから婚禮の儀式、或は初老、還暦、葬儀、法會、總ての事柄に就いて一つの標準を定め、無法に時間を費すと云ふ事をせぬこと、身分不想應の奢りをせぬこと、嚴重に規約を設けたのであります、今日さう云ふ規約を強制したならば此の理窟の多い時代には何とか云ふでありませう、我が村當局者は消局的の政策を取過ぎるとか、イヤ壓制極まる規約であるとか何とかやかましい議論が出ると思ひますが、今から二十五年も以前の事でありまするし、殊に苦しくなつて、自覺して居りまする際でありますので、此の窮屈な、多少壓制を意味した所の勤儉規約なるものが能く行はれたのであります、モウ茲で遊ぶ事を止め、奢ることを止め、一村が一と固まりになつて行かぬと、此村は滅びると云ふ難關に迫つて來て居ります爲に、此の窮屈な規約が比較的能く行はれたのであります、これか習慣となりまして今日迄未だに興行はしませぬ、一寸今日の御催しのやうに學校の講堂を開いて、其所で何か娯樂と云ふやうな催し事は致しましても弊害のある演劇等の興行は未だに一切いたしませぬ、さう云ふ風にして一村は殆ど世界の變つた如くに改革したのであります、所がさう云ふ風に改革をする、勤儉力行と云ふ事になりまする、勤儉をしたならば餘裕が出て來なければならぬ、貯蓄をせいと斯う云ふ事になつた、儉約をして働らく、それは至極結構である、其の儉約と云ふ働らくと云ふ其半面に生ずる所の餘裕其一部を殘して、どうしても貯蓄をしなければならぬ、それで始めて村の改革の方法が實際に現はれるのである、各自に貯蓄をしなければならぬと云ふことになつたのでありますが、中々貯蓄が出來ぬのであります、貯蓄を嫌ふ者は如何なる事を云ふかと申しますると、此高い金を借りて借金に苦しんで居るのに、一方に僅かでも金を出して貯蓄をするなどゝ云ふ事は出來ませぬと云ふものが一般の意向である併し節儉をして殘した處のものは別物である、其一部を割いて他日不時の用意に幾らでも貯蓄せよと云つても、中々せぬのであります、其の筋からも是非やれと勸める、申譯に村の役塲に居りまする者と學校に居りまする者と八人寄つて、一ケ月三十三錢の貯金をした、丁度今日の青年會の會員が獨立自營の精神を養ふ爲に毎月行ふ所の貯金が一人三十錢以上でありますが、其時代には村の役塲に居る者、學校に居る者、多少譯の分つた連中が八人寄つて一ケ月三十三錢の貯金をした、それ位ゐ貯蓄の思想と云ふものは幼稚であつたのであります、それでは迚も此大きな負債を償却し、夥しく他

村の人に持たれた所の土地を買戻す事は出來ぬのであります、是非之は强制的にでも此貯金を勵行せしめなければならぬといふので、當時の戸長であつた我々の先輩の人等が非常に勸誘を致して、私ども丁度十九の年であつたと思ひますが、今から若い者等が大に奮發をせよ、此の貧乏村に目鼻を付けて將來やつて行かなければならぬのであるから、是非とも一つ奮發して勤儉貯蓄の龜鑑を造れ、斯ういはれて當時の若い者即ち我々青年であつた者が、申合せてそれから夜業を始めた、今の青年會で能く奬勵される所の增業即ち夜間に繩を綯ふのであります、夏は朝早く起きて草を苅つて干草を拵へるさうして一年に五月多く働き出す、半年に別けて二圓五十錢づゝ其の働らき出した金を寄せる、即ち勤勉貯蓄寄せ貸組合を拵へて、之れを誘社と稱へました、其金を集めまして、それで先づ以て農家の肥料購入資金に苦しんで居る者に其金を廻したり、村外にある所の借金の催促の急なものに返濟をする、少し其內に餘裕が出來て、他村の土地を買戻さうと思ふが金が足らぬといふ者に貸與へる、斯ふいふ風に金を寄せましてさうしてさういふ方面に貸與へる途を開いたのであります、丁度今の產業組合の仕事と同じことであります、其時分は產業組合でも貯蓄組合でもない、唯寄せ貸し講と云つて居りました、そうして普通の金利は月一分五厘、即ち年一割八分であるが、此の寄せ貸貯金の貸付は月一分である、今なれば月一分と云ふ金は非常に高い金で高利貸といはなければならないが、其時代に月一分は廉かつたのであります、皆々其金を歡迎して借りました、さうして其金で負債を償却し、或は村外の人に持たれた所の土地を買戻しをすると云ふ事にして居つたのでありますが、僅か一年五圓半年二圓五十錢づゝ勤勞して造つた所の金、それから是を實行した者は其時分の現在の戸數から算へて見まして十分の一も無いのであります、漸く四十何人でありましたが、其金は貴いので、寄せて貸す、それが月一步でありますから非常に利殖の度も早いので、丁度二十年から二十九年までやつて居りますると、一万五千圓近い金が出來たのであります、其金が彼の二十七八年の日淸戰役の後、事業熱が勃興しました時代に、色々銀行や會社と云ふものを拵へると云ふ事が流行つた、其時に此貯蓄をした者だけが相集つて其金を資本にして銀行に引直し、一村の爲に金融機關を造りましたのが唯今ある所の玉瀧銀行と云ふのであります、さう云ふ歷史で出來ました銀行は株主は村外に無いので、悉とく村民が株主であつて、此の貯蓄をやつた者だけが其の株主となつたのであります、それが三十年に出來ましたので本年は三十三期になると思つて居ります、一万五千圓と云ふ繩を綯つたり乾草を拵へたり色々やつて拵へた金が銀行の資本となりまして、相當の成績が擧かるそれから利益金は每年一割だけ配當して跡は積立て置く、今拂込みは依然として一万五千圓でありまして、積立と諸準備で一万九千何百圓チョッと二万圓ばかりあります、それが今二十五万圓乃至二十七万圓の預金がありまして我村の總ての產業方面の資金を供給して尙ほ餘りあるやうになつて居るのであります、それは二十六年も經過した今日の御話でありますが、兎に角我々が青年時代に、此村の最も困難な時代に

始めた貯蓄が遂にさう云ふ基を爲して一村の爲めの金融機關を造つたのであります、さう云ふ風にして青年も働らき、無論其時の世帶持ちも一生懸命になつて働いたのであります、扨此の働らくと云ふ事になりまするど地方の人氣が大變に變つて參りゐした、一生懸命働らく爲に惡い考へをせぬように なる、それから各戸の勞力が餘つて參りました、それまでは僅か田畑を通じて此百四十一町歩ばかりの耕地を耕作するのに美濃あたり、尾張あたりから畔鍬と云ふて勞役者が入込んだ、所が斯う云ふ嚴重な規約を設けて働らくやうになりましたに就いて勞力が餘つて參りました、ソロ〳〵村の者が何か仕事を始めて貰はぬと、是だけの百姓では仕事が足らぬ、一村として何か事業をやつて貰ひたいと云ふ事になつて參つたのであります、茲に於て村は借金をして幾多の工費を投じて、先刻申上げましたやうな道路を改修する、溜池の構築をする、水路の改良をすると云ふ風に、農閑を見計つて、農耕作に差支を及ぼさない時期に於て、色々の土工を起した、其時に此日燒けを免れる水利上の手當なども多く出來たのであります、又一面には農作法を改良して、增收を計り或は少しでも農業の傍らやつて居る所の商工業に就いても相當の保護を加へて、さうして一村が一生懸命になつて借金を償却する事と、土地を買戻す事に努めて居つたのであります、明治二十七八年の戰役の始まりました當時、私の村は軍事公債を僅か千八百圓割當てられた、千八百圓割當てられた軍事公債を個人として應ずる事が出來なかつた、夫れは少し餘裕を生ずれば借金を埋めて居る、地所を少しでも買戻して置くと云ふ風にまて少し出來れば其金は村外に出て行く爲に誰も餘財を造つて居らぬ、國家の大事に當つて千八百圓割當てられた軍事公債を個人として持つ力が無いのであります、止むを得ず公有林にある所の立木を賣拂つて、此割當てられた丈の軍事公債の募集に應じて僅かに奉公の誠を致したやうな有樣でありま す、一村の資力がどれ位枯れて居つたかと云ふ事が此一点でも分るのであります、それから十年經つて三十七八年の役にはどうであつたかと云ふと、三十七八年の戰役には十四万幾らと云ふ國庫債劵の申込みをしまして、三万幾千と云ふ募入になつたのであります、個人ばかりで引受けて未だ一村の公有金、積立金と云ふものから其募集に應ずるまでには到らなかつたのでありまして、此十年間に餘ほど其の資力が發達したのであります、大變長くなりました一寸茲で休憩を致たします、

　先刻來農學校長、本縣の庶務課長、各々有益なお話がありました跡で私共が又下らぬ實驗談を申上げると云ふ事は定めし御迷惑であらうと考へます、昨日は其の半ばを御話いたして喰切りになつて居りますので、今少しあの話の結末を付けて置かうと思ふのであります、暫らく御辛抱を願ます、

　昨日も申上げた如く、一村の上下を擧げて油斷をして居りました結果は、遂に殆ど全村破產の運命に陷つたのであります、物事もあれだけ逆境に到りますると、又自覺するものでありまして、全村眠りから覺めて共同一致して、勤儉力行いたした結果は、多少の目鼻が付いて參りまして、村外の負債を償却するとか、村外に流れ出でた所の土地を買戻すとか云ふやうな機運に向つたのであります、二

十七八年の戰役には、彼の國家の大事に當つて一村僅かに千八百圓の軍事公債の割當を受けて、個人として是を引受ける者がなかつたと云ふお話をしたのでありますが、實に一村の財源の個謁して居つた事を証據立て誠におはづかしい次第であります、併ながら其時代は恢復の時期に向いて居て漸次恢復の途に進んで居つたのでありまして、唯村外の負債を償却すること、他村の人に持たれた所の土地を買戻すと云ふ方に廻される爲に個人としての資力が無かつたのであります、而かも日清戰爭後の自治經營は彼の十年西南役後の空景氣に浮かれて取返しの付かない疎匆たしたと云ふ事が、多少良き敎訓になつて居りまして、一般に互ひに相助け相戒しめて戰後の經營に勵みましたのと、御承知の通り國民として忘るへからざる彼の三國の干涉、遼東半島還付なとゝ云ふ大に刺擊されるやうな事柄もありました結果、相俟つて一の覺醒の域に進んだのであります、彼の戰後に暫らく續きました好景氣にも更に浮かれる事もなく、堅實に總ての仕事をやつて參りました爲に、三十三年から此年に掛けて起つた所の經濟界の動搖にも差して苦勞はしなかつたのであります、一村の有樣を眺めて見ますると何所となく秩序か直つて來たではないかと云ふやうな樣子が仄見へたのであります、併ながら果して一村の狀況がどの邊まで恢復して來たのであるか、又生産と消費との關係がどう云ふ工合になつて來たかと云ふ事は分らぬのであります、以前に比ぶれば多少增しになつたらうと思はれまするけれども、未だ數字上是を明かにする所の運はなかつたのであります、玆に於て彼の村是の調査を始めたのであり

ます、三十三年から四年に掛けて村是の調査を始めまして、色々の統計小票などを配付いたして調査いたしました、委員を選んで各戸の巡回調査もやり、或は農業の方面に於きましては試驗地、試作地に依つて色々の生産標準も調べて見る、色々の方面から一村の所謂店卸しをして見たのであります、三十四年村是調査結果として數字の示す所に依りますると、前に四万千六百圓あつた所の負債が其時には二万六千六百圓に減つて來た、四万千六百圓の借金が二万六千六百圓に減つたのでは、幾ら程も減つたやうではないのでありますけれども、此間には昨日も申上げた如く村の勞力に餘裕を生じた爲に土木工事を起して居る、其土木工事の爲に一万三千圓ばかりの借入れをしたのであります、前の四万千六百圓に此一万三千圓を加へたものから現在の二万六千六百圓を引去つた殘額貳万八千圓は全く其間に償却をされたと云ふ成績を見て居るのであります、今一つは廿町歩の他村人所有地に對し六百俵から持出して居つた所の小作米はどう云ふ風になつたかと調べて見ると其時には六町歩だけ殘つて居て、十四町歩と云ふものは買戻した從つて一時は六百俵拂つて來た小作が百八十二俵に減じて居る數字を見たのであります、それから一村の生産收入はどうかと云ふに十五万六千七百六十六圓となりまして、消費額が十四万九千三百〇五圓、差引七千四百六十一圓兎に角殘る勘定になつたのであります、是は昨日來申上げた如く非常な決心を以て又窮屈な勤儉規約を布いて、村民全部が殆ど勤儉力行して得た所の結果である、今一つは卅三年、卅四年には各種の農作物が豊作でありました、即ち天然

の惠みが是を手傳つて居る、此二つの結果で生產額から總ての消費を差引いて七千四百六十一圓餘ることになつたのであります、若し此の農作物なるものが三十三年、三十四年の如き好結果を收めなかつたならば到底生產と消費の差引額は足らぬ事になるのであります、今一つは其時まで行はれた如き嚴重なる勤儉規約と云ふものがさう長く續くものではないのであります、何日までも其んな窮屈な規約を布いて唯働らけ、唯儉約をせよと云つて、村民を導いて居りましたならば其結果は遂に農村生活を嫌ふ傾きを生じて來るのであります、どうしても此村民を導びきまするには一方に於て或る種類の娛樂を與へ、又生計の上にも多少の弛けを付けて所謂農村生活を樂しくさせなければならぬのであります、所が此計算に依りまするど、どちらか一方強みまするど足らぬことになるのであります、村民の生計に幾分向上を示して來る結果、少し弛めれば足らぬのである其の方は相變らずやるとしましても農作物が三十三年三十四年の如く農作を得ませぬならば矢張り足らぬのである、是では尙ほ前途安心して生產消費の關係が剩餘を生ずると云つて樂觀する譯には行かぬ、然らば此先はどうしたものであるか、最早此上の勤勞を强ゆると云ふ事は出來ぬ、唯是までの如く働らかしめて、而して其働いて居の所の事業其もの丶方法を改良して、それから財源を生み出すより外に途は無いのであります、矢張り同じやうに勤勞を基として、多少仕事の內に無駄骨を折らぬ注意をする、其仕事の方法を改めて同じやうに働らくのであるが、結果のモウ少し能く現はれて來るやうに仕事の方法を改めて行くと云ふ事、所謂村是を定めて此先き村民之是を實行せしめる所の手段にせなければならぬのであります、此處に於て私の村で村是と云ふものを定めて三十五年から實行せしめようとした、今でも實行して居るのであります、其の村是と云ふものはどんな立派なものであるかと云ふと、一向立派なものでも何でもない、如何にも平凡なものであります、どう云ふ事を定めたかと云ひまするど、第一に農村でありまするで農作法を改良して其の產額を增加する事、それから米選俵裝を改良して其の價格を向上せしむる事、共同購入及ひ共同販賣組合を設くる事、山林の整理を完成する事、基本財產を造成して自治團体の基礎を鞏固ならしめる事、勤勞を勸めて貯蓄を實行せしむる事、餘業の種類を撰擇する事、別段に村是として定めませぬでも農村として當然やらなければならぬ事柄ばかりであります、當時村是と云ふものは單り私の村で作るだけではなくして、三重縣あたりでは大分各所で出來たのでありま す、皆立派な村是であります、即ち理想の高い人達が考へて作られた所の村是は皆立派でありますが單り私共の村で拵へました村是は今申上げたやうな甚だ平凡なものであります、併ながら村是の事項を飾つて、さうして實行の出來ぬ事を列べ立て丶見ました所が何もならぬのであります、其揭げてある事柄は平凡でありましても、是を確實に實行せしむると云ふ事が即ち村是の目的であります、所謂付易うしてそれを何人にも、確かに行はせやうとする村是の七項目を定めたのであります、第一に農作法を改良して其產額を增加する事、是はどう云ふ目的であつのかと申しまするど、其時分に私共の

地方の米は種類が甚だ雜駁でありました、又反當りの收獲が甚だ少ないのであります昨日地勢其他の狀況を御話申上げた如く、山腹に介在して居る所の耕地でありますから、冷え水掛りがあり、木の蔭があり、色々の事がありまして、反當りの收獲と云ふものは當時一反步平均一石九斗でありました之れが種類の統一改良をして、それから推積土肥、勞力て出來る處の土肥を盛んに拵へて、さうして金肥の需要を節約し、又金肥を使ふのには能く其種類を撰擇する、それから正條植を行ない、害虫驅除を勵行し、苗代は短冊形に仕立てる、今の苗代は悉とく、共同苗代でありますが、其時分は短冊形苗代であります、それから稻作の上に各種の改良をいたして十年間に村內の平均收獲を二石に增加しやうと云ふのが目的であります、即ち一石九斗の反當りの收獲を十年掛つて一斗の增收をして二石にしやうと云ふのか一つの目的であつたのであります、それから米選俵裝を改良して其の價格を向上せしむる事、之れは道一重を境にいたして向ふは滋賀縣であります、滋賀縣の方は其時分既に近江米改良組合を拵へて居ります、今の近江米同業組合の前身であります、改良組合を拵へて盛んに米の調製、乾燥、俵裝に注意して居る、それが爲め近江米は高いのであります、同時に伊賀米はどうであるかと申しますると、私共地方の伊賀米は固より評判が宜くない、伊賀米の內殊に水田米でありまして米質甚だ惡かつたのであります、加へて乾燥が惡い、水田に取れた米を十分に乾燥をやるものだから非常に惡いのであります、乾燥の惡い爲に米が夏を越さぬのであります、梅雨を越せばもう普通の食料にならぬ、其の食料にならぬ所の不良の伊賀米は何故に捌けるかと云ふと大阪へ參りまして、二つ井戸の岩をこしの原料になつたのであります、偶々自作農家で出來まする良い米がありましてもそれはドン〳〵道一重越して滋賀縣の産米の中に這入つて近江米となつて賣れて居る、即ち偶々出來た良い物は近江米となつて、表向き惡い物だけが伊賀米の名を代表して大阪へ行つて岩をこしの原料になつて居る、さう云ふ譯でありますから毎年米が出來秋には廉ぐつて、さうして端境にあつて高くなると云ふ事は明らかでありましても、米を貯へて其値段の高くなるのを待つて賣ると云ふ事が出來なかつたのであります、それで何時でも近江米と一石に就いて五十錢づゝ下値で居る、同じやうな勢力を加へて同じ地味に米を造るのに偶々良い米が出來れば近江米になつて仕舞ひ、多くの米は惡い商標を附けて今申すやうに、近江米と一石に付いて五十錢の差が付いて居る、其の近江米と同じやうに改良して同じやうに賣らなければならぬと云ふのが、此の米選俵裝を改良して其價格を向上せしむると云ふ所の着眼であつたのであります、一面に於ては農作法を改良して産額を增加する、今一つは其增加した所の産額、其出來た所の米を近江米に負けぬやうに賣らう、斯う云ふ考へを立てたのであります、然らば其評判の惡い伊賀米を近江米と同じやうに賣るには如何なる方法で賣つたら宜からうと云ふのでありますが、之れは近江でやつて居る通りの事をすれば宜いのである、即ち其方法と致して第一此の水田で苅取つた稻を悉とく稻架掛けをして五日以上乾燥する多數の農家の中には永く乾燥をすれば米

質はよくなる如く信する人もありまするが餘り稻を早く掛けて置けば米の光澤を失ひます、夫れ故に村是の規定には五日以上の架乾しをする事とし水田の稻を刈取つたならば必ず稻掛けをする、而して扱き取つた後に莚干しをするのを三日以上と決めました、莚干しも一枚の莚で干しますると土地の濕りを呼びまして十分に乾きませぬ、古莚、藁屑若くは菰を下へ置いて、兎に角二重にして干す、調製しまする時分には一番摺りを以て賣り米及び小作米に當てる、二番摺りは自家の消費米にして賣り米には使はない、それから俵装は完全にする、二重俵装にして縱縄を掛ける、其當時滋賀縣でやつて居りました通りの事を全村に實行したのであります、尤も之をやるに就いて一番やり易いのは自作農家で一番困るのは小作人であります、どうしても小作人に何分の補助の途を開いて小作人を奬勵して滿足してやらせなければならぬ、米の品質が向上して來れば米を賣る者は宜しい、就中地主側のものは利益は多いが、一番困るのは小作人であります、矢張小作人を奬勵して小作人に滿足をさせなければならぬ此處於て、地主と小作人との協議會と云ふものを拵へまして、米には總て等級を付けて、等級に應じて奬勵金を與へる方法を執つたのであります、尤も今のやうに縣令で米穀檢查規則を置かれた時代とは違ひまして、何等據り所はないのであるか只村内の計畫即ち村是として全村實行すべきものである、其實行をするに就いての方法實行と云ふ方から生み出した仕事でありまして、地主小作人の協議會を開き奬勵金の步合を定め、一等米は一俵に付して十五錢の奬勵補助金を與へ、二等米は十二錢の奬勵補助金を與へ、三等米は八錢の奬勵補助金を與へる、其以下の米は小作米に授受すべからずと云ふ風に等級を定め、標準を置いた、奬勵の手段としては等級を定めて奬勵金を與ふるのみならず小作米品評會を開いて優良なる小作米を賞與し小作人を旌表し又村農會に奬勵費用を與へまして、村農會の事業として總て村外の取引に供する所の米は檢查をしたのであります、それから山林の整理を完成する事、之は先刻も庶務課長の御話の內にありましたが公有林、部落有林は唯今統一上喧間敷問題になつて居りまするが、公有林は、どうも持たれ合になつて居つて濫伐をする、廣大の反別を有して居りましても割合に利益が擧がらぬ、それを整理いたして造林すべき場所、開墾すべき場所、或は自由に入合ひをさせて綠肥を採收する、細民の爲めには小柴を苅取るに差支へない部分を設けて、色々種類を別ちまして山林を保護し樹木の成長してある處は年次計畫を立てゝ何所から輪伐するが宜いかを定めた恰度當時やかましい所の部落有山林の統一利用即ち公有林野整理と同じものであります、其方法で之も矢張り縣が林野整理規則を發布する以前、此村是の實行方法として定めたのであります、それから基本財產を造成まして自治團体の基礎を鞏固ならしむる事、基本財產は每年三百圓づゝ積んで行く、二十年經つて二万千三百圓出來るので、其財產から生ずる所の收入で他日村費の負担を輕めることが出來ると云ふ計畫を定めたのであります、最も唯今の如く物價が高くなり町村費が膨脹いたしますると迚も斯んな少額の積立方法では追付くものではないのでありますけれども、其時代には唯此

基本財産の造成と云ふことが町村の爲に大切な仕事の一つであると云ふ考へだけで此計畫に掛つたのであります、それから勤勞を勸めて貯蓄を實行する事、勤勉貯蓄は一日に一錢づゝ、一戸を構へて居る者は必ず一錢以上の貯金をして行く、さうすると之が二十年後には二万三千四百五十六圓と云ふ金になる、一村の者が總て斯う云ふ風に貯蓄したならば遂に一つの固まつた財産が出來て、無資無産の者が無いやうになる、其金に依つて他日一種の恒産を得ることが出來るであらうと云ふので、此日掛け一錢貯金の方法に付加へまして各部落に貯蓄組合を造つたのであります、まだ此時代には、今の産業組合法は發布されて居りましたけれども我々の頭に其智識が無い爲に産業組合法による信用組合の名は付かぬのであります、唯日掛一錢の貯蓄組合を拵へた今一つは共同購入及び共同販賣組合を設くることこれも産業組合法により購買販賣組合を拵へると云ふ事には未だ參らぬのであります、唯地方で生産する所の物産を成るべく共同して値を高く賣ること、又地方の自家用品は成るべく共同して品の良い物を廉價で買ふて、農家の利益を保護すると云ふ方法を設けたのであります、それから餘業の種類を選擇すること、副業の種類は別に選擇せずとも利益勘定の合ふものであつたなれば宜しい筈である、何が故に特に副業の種類を選んだかと申しますると、昨日も申上げた如く耕耘上非常に困難の農作地で少しも牛馬耕の利かぬ水田が大部分を占めて居りますが故に勞力の分配は大に考へて置かねばならぬのである若し副業の種類を選まずに唯一日の賃錢だけ多く取れば宜しいと云ふ事になりますると一方で失ふ所が出來て來る、副業に耽つて其方で大分金は取れるけれども、一方の稲作に隙が出來て來て取落ちがあつては何もならぬ事になる、勞力の分配を極く調節いたして、副業に耽つて主たる農作が疎そかになるやうな憂のない樣に、極めて簡易なものを選んだのであります、雨が降る、外の仕事をやめて這入て來る直ちに家内工業をやる、日が暮れて歸つて來た、夜業にもやる、朝雨が降つて居つて仕事を始めた、其内に空が上つた、直ちに止めて野に出られる、斯う云ふ風に眞に重要なる農作をやつた傍ら寸陰を惜んでやる所の手輕なものを選んで行かなければならぬと云ふので、此の餘業の種類を選擇することにしたのであります、然らば其手輕な農作に響かぬ所の副業と云ふものに何を選んだのであるかと申しますると、麥稈眞田を造る事を考へたのであります、麥を作つて、其藁を取つてそれから眞田を編んで是を賣出す、僅か是も其時分の計算では工賃の收入四千五百圓ばかりであるけれども、夜業や雨天の日に癈たる時間廢たらぬやうにしてやらうと云ふ計畫を立てたのであります、麥稈眞田をやると云ふ計畫を立つて、それから職工を香川、岡山邊へ出しまして眞田を編む事を習はせた、）それが歸つて來て村で練習所を開いて大勢の子供に教へたのでありますが、眞田を編む技術は習ひ得たのであるけれども、肝腎の原料が駄目になつて仕舞つた、私共地方の麥は成熟期と霖雨の時期と一所であります、麥の藁に一種の斑点が這入る、シミが這入りまして香川縣や岡山縣、或は愛知縣で出來ますやうな、殊に奇麗な麥稈にはならぬのであります、折角それを編上げて眞田に致し

てもどうも賣れませぬ、それから此仕事は麥稈の原料を使ふ事を止めまして、山にある所の白揚、どう柳いも木の如きものを伐採してそれで經木を拵らへ、經木眞田即ちへぎ眞田を編ませるやうにして今尙それを續けて居るのであります、今日では多く女子供の仕事であります、學校へ行く子供なども學校から歸りまして、温習を濟ませて、それから此へぎ眞田の編物を始めます、其んな風で極く行ひ易い仕事ばかりを教へ主たる農事に差支への起らぬやうなものを選んで、此方法に依つて村民に實行せしめたのであります、此間には彼の振古未曾有の大戰役が始つたのであります、二十七八年の戰役は餘程人心を興奮した、總ての仕事をやるに都合が宜かつたのでありますが、三十七八年の戰役には人心の興奮は尙一層の事でありゐす、外に從軍して居られる所の軍人の勞苦はどんなものである、內を守つて居る者と日を同じうして語ることは出來ぬと色々の話をしまして村民を皷舞督勵して、一生懸命此仕事をやらせて見たのであります、此人心の興奮を利用して總ての事柄を勵行せしめました結果は意外の成績を擧げたのであります、即ち今項を別けて申上げました實行事項の內第一に申上げた十年掛つて一斗の増收を見る、即ち一反步平均一石九斗のものを二石までに進めると云ふ米の増收計畫が、三十九年には二石六升五合になつたのであります、豫想以上になつた、それから四十年には二石七升七合になりました、四十一年には二石二斗三升二合になつて、四十二年には二石二斗八升八合四十三年には少し不作で二石二斗四升六合に下りまして、一昨年四十四年には又豊作で丁席收獲平均が二石三斗八升七合と云ふ事になつた、十年掛つて一斗の増收計畫が兎に角四十四年には忽ち十年を待たずして四斗八升七合と云ふ増收を見たのであります、其増收の目的を遂げた所の米の値段、即ち第二項に揚げた所の米撰俵裝の改良に依つて近江米と同じ値段に賣らうと云ふ所の米の値段はどう云ふ風になつたかと申しますると、是が丁度三十六年からボツ〳〵其成績が擧つて參りまして三十七年には近江米と負けぬだけに賣れるやうになつて參つたのであります、時の郡長が此成績を見られて、是は一村位ゐでやつて居る仕事ではない是非之を全郡に及ぼして伊賀米なるものゝ聲價を高めなければならぬと云つて、其時に阿山郡に於て產米同業組合を拵へたのであります、產米同業組合を拵へますると、隨分色々な故障がありまして中々實行はむづかしい、或る部分では見做つて實行しましたが或る部分では中々故障を云ふて行はれぬ、小作人の小言は最もであるが地主迄が異議を云ふ此處に於て縣は英斷を以て米穀撿查規則を布きましてさうして是を全縣下に及ぼしたのであります、斯樣な譯ります近江米の値段が段々に騰つて參りまして、もう四十年頃になりまするど、四斗一升這入つて居て我地方產米と、四斗しか這入つて居らぬ所の私共の地方の米と値段に於て違はないやうになりました、前には一石五十錢の下になつた所の伊賀米は四十年に至りまして、近江米よりは一升少なくても同じ値段で賣れるやうになつた、それは標準米の話でありますが、特に私共の地方で優良米と云はれて居る所の錦、關取の類は尙ほそれ以上の値段を見るやうになつたのであります、御參考の爲に、私

共地方の米の値段を申上げまするど、本年一月の共同販賣の成績に依りまするど、一石が廿四圓廿八錢一厘即ち四斗俵が九圓七十一錢二厘であります、是れは産業組合の附屬共同集積倉庫に於て共同販賣いたした値段であります、夫れから二月は少し下りまして一石が廿三圓三十二錢八厘、一俵九圓卅三錢一厘、又昨年中一番米の高値は七月でありまして、一石廿五圓六十五錢、即ち一俵が村の倉庫放しで十圓二十六錢でありまして、其時に東京の深川では確か二十七圓であつたと思ひます、東京深川に於ける伊賀米が一石二十七圓と云ふのは是は日本全國第一の高値であります、私共の村の倉庫で二十五圓六十五錢に賣れましたのが深川へ持つて參りまして二十七圓では運賃諸掛を計算して産地の方が高い勘定になり尙ほ近江米より高い譯になつて居るのであります、さう云ふ風に米の增收計畫を遂行し、それから米選俵裝の改良に依つて價格の騰貴いたした事柄は實に著しいものであります、承はる所に依りまするど御縣に於ては一兩年以前から着々此米穀檢査の御準備が出來まして、大正二年には産米檢査を御實施になると云ふ趣きであります、此仕事は旣に私共が村是の實行事項として數年やりまして此の日本で一番惡かつた伊賀米が斯の如く聲價を博した實が擧つて居るのであります、御縣の米が是から檢査規則に依つて此方法を段々御實行になりましたならば、前途得られる所の利益は非常なものであらうと思ひます、それから共同購入及共同販賣の事業の成績はどう云ふ事になつたかと申しまするど、初めは此産業組合と云ふ事が分らぬので、農會の奬勵事業として、やつて居りました米などは一つ所に集めて賣る、肥料、食塩、皆集めて共同買入れをして、肥料の如きも私共地方ではれ正月までに總て買入れをいたして、さうして自分の納屋に積込む、小作人もれ正月までに小作米を地主に納めて仕舞ふ、小作米を地主に納め、翌年の稲作に肥料を買入れなければれ正月になつても所謂新年の門松を立つても目出度いとは云はない位のものであります、さう云ふて居りましても中産以下の農家では資金の都合上中々それが行はれず、小作米は年内に納めて仕舞いますか、肥料買入れの準備と云ふものが往々手後れとなりまして、翌年耕作期に差迫つてから不利益な條件の下に商人から借入れをして、新穀の取入れ早々是れを賣却し又それを返濟すると云ふことになつて居るのであります、然るに此全村の共同購入共同販賣と云ふ道が開けましてからは其やうな不利益な事もなく、米は凡て共同して賣る、若し米の値段が振はぬ時は共同集積して信用組合の方から資金の融通を求める、又肥料の如きもの自分の手に金の有無に拘らず、農會が能く是を保護しまして、總て買入れを共にすると云ふやうな風に、賣る物も亦買ふ物も一つの保護を與へて奬勵をいたした結果、漸次此共同と云ふ利益を悟りまして、丁度昨年あたりでは一村の賣米一万二千俵の中共同倉庫で賣りましたる米の俵數が七千七百三俵と云ふ事になつて居ります、又肥料なども餅其他の各種の肥料が二万四千九百八十一貫と云ふものを買入れて居ります、食塩の如きも二万五千斤共同して買入れて居ります、蠶卵紙も全部同共して買ふ、時に依ると農具なども共同して買ふ、其都度共同購入、共同販賣の利益を知り、

自然に共同しましたる結果は遂に購買販賣組合を拵へるやうになつたであります、又購賣販賣組合を拵へまして、一年中間斷なく購買販賣の事業を行ふに付いてはどうしても一つの足溜りがなければならぬ、茲に於て彼の共同倉庫の必要が起つて參つたのであります、一字毎に共同倉庫を拵らへ、賣る物はそれに集め、買ふ物は停車塲から引取る時に大嵩の物はそれ〳〵傳票を以て買取人又は委員に引取りをさせます、準備に貯藏して置く物、或は嵩の少ない物は皆共同の倉庫に引取つて、さうして其所から分配をすると云ふやうなことになつて居ります、村是を拵へまする時分には共同して物を賣る或は共同して物を買入れると云ふことは知つて居りましたが、併し此購買販賣組合を拵へるとか、共同集積倉庫度を造ると云ふことは當時分らなかつたのであります、事業其ものが進むに從つて斯う云ふ機關を造らなければならないやうに段々なつて來たのであります、共同倉庫の御話を今少し詳しく致したいと思いますが、時間の都合で出來るかどうか分りませぬ

それから山林は重もに天然林の保護でありますが先刻も申上げた如く、開墾に適する處共同入合ひになつてある所細民の小柴、下草を採取する所或は造林或は天然林を保護し隨時に斧入を許さぬ場所を定めそれから育つた所の樹木を段々伐拂つて其跡地に植林して行く、斯う云ふ風に區別をいたして現今天然林を保護する部分は丁度二百五十三町歩で、是は松雜木が生へて居りまして、毎年松茸、香茸、雜茸が二千圓から三千圓位ゐ採收するやうにあつて居ります、村是を定めまして今日まで百六十町歩の造林豫定の內五十九町一反歩は植付け濟みになりました、それから百六町歩は開墾と共同入合ひ地とで皆々利用して居るのであります、此山林の利用に依つて一年に收入しまする所の村產物と云ふものは二万五千圓ばかりであります、それから基本財產は一年に三百圓づゝ積んで行つて二十年掛つて二万千三百圓拵へると云ふのが始めの計畫であつたのでありますが、段々時勢の進步と物價が騰貴して參りまするに就いては、是ばかりの金を積んで參りましては、迚も何日の時代を以て此基本財產の收入に依つて村費を支辨して行くと云ふことが出來やうか、是は時勢に適應して蓄積計畫を改めねばならねと云ふので、四十一年に條例を改正いたして基本財產より生ずる收入は勿論、國庫、縣の交付金、使用料、手數料の全部を基本財產と致し、尙は每年八百圓づゝ村費から操入れやうと云ふことに計畫を變更いたして、之に依つて得た所の基本財產は昨年までに一万九千八百五十六圓を造成致しまして、唯今では一年度に丁度二千圓ばかり增殖して行くやうになつて居るのであります、即ち最初の計畫は二十年で二万千三百圓を造るのでありましたが、此條例の改正に依りまして、現在に於て旣に二萬圓に近い金を造つて參りました、此趨勢で進みますると元の明治六十五年即ち大正二十一年になりまするど十三万圓の基本財產が出來まして、其の十三万圓から生ずる所の收入で一村の經常費だけを支へることが出來るやうになつて居るのであります、尤も此先き時勢が尙進んで參りまするど此計畫で甘んじて居ることは出來ませぬ、今一層增加して行かなければならぬと思ふのでありますが、

それは丁度增加すと所の方法は一つ別になるのであります、それは勤儉規約を布いて總て冠婚葬祭の塲合に於ても各々其分限を守つて餘り奢らぬと云ふ事になつて居ります、無用の時間を費したり、無用の費用を費すと云ふことの無いやうになつて居ります、其の冠婚葬祭の塲合に無用の費用を省いてそれを自分の懷ろに入れて置くのでは節儉の趣旨に適合せぬ所がある、故に一般の規約に依つて其雜費の節約が出來るなれば其內の幾分を割いて必ず是を公共事業に投ずると云ふ事になつて居ります、稍々身分の宜しい人は必ずさう云ふ事のあつた時には是を基本財産に出す金額の少ないものは學校の設備費或は貧民子弟等の就學奬勵金に寄付すると云ふ事になつて居りまして、其基本財産に寄附せらるゝ金だけが每年蓄積豫定以外になつて來るので、工合能く參りましたならばそれ等の收入を合せて此先き總ての物が膨脹して來て、所謂村費が膨脹するに從つて、基本財産の元金を殖やして行かなければ、其財産收入に依つて村費の支辨に充つる事は出來ぬと云ふ不足額だけは其の方から增加することが出來るであらうと考へて居ります、唯今の所では元の明治六十五年には十三万圓の基本財産は確實でありまして、それで村費の經常費を支へると云ふ考へを有つて居るのであります、今一つ別途に此村是の計畫が出來ました後に、基本財産以外の、基本財産が一つ出來て居る、それは何であるかと云ふと神社の基本財産であります、神社は、先刻庶務課長の御話もありましたが、三重縣では非常に此合祀と云ふ事をやかましく云ひまして、私共の村なども丁度三十八社を合祀して居る、三十七年から四十年に掛けて三十八社の神社を合祀いたして村社を統一した、其神社は他日基本財産の收入だけで維持の出來るやうにしなければならぬと云ふので、此方に幾らか基本財産を造つて居る、現在神社の基本財産は公債と社債と銀行預金で三千圓、耕地六反五畝步、山林が二十四町步、是だけが神社の爲に造つたのであります、村是を拵へました時分には神社に向つて基本財産を造ると云ふ計畫は無かつたのでありますが、現在はさう云ふ風に出來て居りますから結極神社と村とを通じまするど明治三十五年後に造つた所の基本財産は三万五千圓ばかりになつて居ります、それから貯蓄組合、彼の貯金に於ても先刻申上げた如く現住する者は必ず一日に一錢の貯金を勵行して、二十年には二万三千四百五十六圓を造る計畫になつて居りましたが、戰役の爲に非常に此仕事が進んだのであります、夫れは世界の强國露西亞を相手に軍をすれば澤山に金が掛る、金がなければ戰爭は出來ない、色々な事を云ふて彼の戰役の當時に人心を鼓舞いたしました結果非常に貯金の成績が宜かつたのであります、日掛け一錢、月額三十錢と豫定した貯金が非常な勢いで進みまして、二十年掛つて二万三千四百五十六圓造る計畫であつたのが、四十一年六月には既に三万三十七圓と云ふ貯金が出來たのであります、是から村是の實行項目中數字の上で一番の良い成績を見たのでありますが、其所に一つ手落ちがあつたのであります、何が手落ちであるかと云ふと、唯金を積ませ、勤儉をして金を溜めろと云ふ事を勸めまして、而して其金を他日どう云ふ風に利用するかと云ふ所の始末が付けてなかつたのであります、各

部落〳〵で所謂競爭して互ひに金を積んで來て、四十一年六月には三万三十七圓と云ふ金にはなりましたけれども、其部落〳〵に就いて金の使ひ途を調べて見まするど、是を永久の財産にする考へはなくて、自分の方では御寺の修繕をする、お寺を再建することに金を遣ふ、自分の方ではれ宮の拜殿を造る時分の金にするなどと云ふ積りであつた、さう云ふ風に各々勝手に其年限が來たならば遣ふと云ふ事に考へて居りまして、是を共同の財産として長く維持して行くと云ふ途は明いて居らぬのでありまず、それでは折角に金を積んでも何もならぬ事である、れ寺やれ宮を拵へても何もならぬ事である、其方法を改めなければならぬと云ふので、其年の八月に貯金組合の總代を寄せまして、貯金の成績は宜しいか何れも利用方法は不充分である此儘に置いては當底仕方もなからう、一つ貯金組合に於て其積んだ元金を失はないだけに能く保護したら宜からう、又是から先きの金は何れにも散らぬやうに一つの貯金の固まりを造つて置く必要があると云ふ事を云ひ聞かせまして其時之にを信用組合の制度にしたのであります、即ち四十一年の八月に一村一様の信用組合を拵へまして、さうして別に出資の拂込みの出來るものは新たに出資の拂込みをする、極く下級の細民で組合には這入りたいが出資の拂込のむづかしい者は、前に造つた所の貯金組合の三万三十七圓の或る部分を拂戻して第一回の出資に充てまして、此時に全村漏さず信用組合員にしたのであります、丁度それが現住五百四十三戸の內他村から入寄留をした人で永住の見込の立たない人を除外いたして五百三十五戸で組合を造つたのでありますゝ、出資は一口二十圓で、丁度其時に千八百十三口拵へました出資の拂込の出來ぬ者には前に拵へた所の貯蓄組合の貯金から振替へて拂込みをやらせまして、翌年からはそれはどうしても出來ぬ事として、第一回の出資を終つてから其翌月より組合員は義務として毎月貯金をやらせる、毎月三十錢の貯金をやらせまして、さうしてそれを積んで行く、又毎年一回づゝ出資の拂込みをせしむる、斯う云ふ風にして四十一年八月に貯金組合を信用組合にして丁度昨年の十二月迄に更に三万三千圓の資力を造つたのであります、さうして此組合から一年に低利資金を產業の各方面に貸出しまする金額が大正元年度の成績に依りまするど、四万七千九百圓、物品共同販賣をしました金額が六万九千二百十七圓、共同購入をしました金額が九千三百三十八圓、利益金が千五百七十一圓、積立金が千三百六十八圓、貯蓄組合を信用組合に造り直しましたものがさう云ふ成績を擧げて居るのであります、それから副業の麥稈は失敗いたし迄して只今では經木眞田ばかりやつて居りまするが、是は輸出品で商品の變遷が甚しく非常に好い事もあり惡い事もありまして、是ばかりを村民の副業にする事は出來ませぬので、或は藁繩を綯ふ檜藤細工其他の製作を勸め、或は鷄を飼ふと云ふ事も敎へました、鷄の飼ひ方などは御縣の山武郡源村のやり方を學ひまして一つ所で多くやらずに銘々の家で少しづゝ飼ふと云ふ事を敎へたのであります、唯今は此副業が盛んで藁繩の製作、經木眞田の編製、鷄の飼育、是等で四十四年の統計の示す所に依ると餘業の收入と云ふものが一万八千六十七圓になつて居ります、最初の計

書四千五百圓に比べまするど大分多くの收入を見るやうにあつて居るのであります、斯う云ふ風に一つ〳〵放しまするど、皆小さい事業ばかりでありますけれども、どの仕事も相當の成績を擧げて進んで參りまして、又斯う云ふ小さい仕事ばかりをやるに就いても、勤勞と云ふ所の美風が一村の隅々まで行渡りまして、一度衰退した所の資力も漸次恢復して參りましたのであります、それで村是調査の當時はまだ六町歩百八十二俵に村外に支拂はなければならぬ小作米があつたのが、其後數年にして土地を買戻し或は他地方にて買求めまして四十三年には始めて小作米として村內に這入つて來るものと村外に持出すものと差引六石七斗餘るやうになつた、其時に村民を集めて、多年勤儉力行した効果は漸く現はれて本年の末には、我々村民は小作人の境遇を脫して眞の自作農家の境遇に再び歸つて來た此先き益々奮勉して、農村としての土地は固より不足して居るのであるから、今少し他町村に土地を持つやうに奮勵しなければならぬと云ふ事を四十三年に話をした事がありますが、其後漸次民間に餘力が出來るに就いて他町村に土地を買求める者も增して參りまして、大正元年末に調べて見まするど丁度二十六石七斗小作米が收入超過になるやうになつたのであります、何れの地方へ參りましても大地主の方がありまして、何百俵何千俵と云ふ小作米が他の町村から這入つて參りまする所もありますから、固より二十六石や二十七石の小作米が收入超過になりましたからと云つて玆で御話をする程の事もないのでありますけれども、兎に角二十年の昔は小作米六百俵を村外に持出して居つた玉瀧村と致しましては其持出した時代から考へましてたとへ二十六石七斗の收入超過になつたと云ふ事は勤勞の蔭で、又此の村是を確實に實行して參りました賜物であると思ふのであります、斯う云ふ工合でありまするで、村の山には松雜木の林よりありませぬけれども村外に於て山地を買入れ林業の適地を撰んで杉檜を仕立て今廿余町歩の造林地を有する事になつて居ります、又曩に澤山あつた所の村外の負債と云ふものも悉く償却が出來まして、今は却つて村外に幾分の資本を貸出するやうになつて居りまするのみならず、昨日た話を致しました村民だけで拵へて居りまする玉瀧銀行は常に廿五六万の預金がありまして、其內の六分は實に我が村民の餘力である、村民が當座小口別段等、各種の預金をして不時の要に備へて居るのであります、斯の如く銀行があり、信用組合があり、何れも發達して居りまするので郵便貯金は少ないであらうと昨年調べて見ましたら漸く九千四百圓しかない、夫れから今一つ村是の計畫でも何でもない別に出來た財產があるそれは何であるかと云ふと、彼の戰役恩賞賜金でありますニ十七八年の戰役に百二名從軍いたして、或は金鵄勳章を貰ふとか色々其時に恩賞の御沙汰がありましたが、多くは一時賜金の公債で恩賞賜金を頂いた、あの時の從軍者の中には高利の負債を有つて居る者があつて、恩賞賜金の公債を賣つて負債を償却しやう、或は一つ事業の資本にしやうと、凱旋して歸る恩賞賜金の御沙汰があると直ちに此金を遣ふことを考へた者が多かつたのであります、振古未曾有の戰役に從軍してお互ひに名譽を子孫に傳ふる事の出來る軍人が、其時に賜はつた所の恩賞賜金

を失つてはどうも面白くなからう、是非是は一村の者の保護に依つて殘して置くやうにしてやつたら宜からうと云ふので當時恩賞賜金保管規約と軍人共濟講と云ふものを拵へて恩賞賜金を是非遣はなければならぬ境遇になる人の爲に年利六朱の低利資金を貸出しまして之れを救濟保護し、恩賞賜金に手を着けずに成るべく之を子孫に傳へる樣に規約せしめました、其代りそれを保管して貰ふ爲に一方で高利金を借りなければならぬ人達の爲に、村民が力を合せて資金を拵へて、六朱の低利貸付をした爲に恩賞資金には一寸とも手が着かなかつた、併し低利の資金を借りて居つて幾年かの間に償却をしなければならぬ人は成るべく働いて利子丈けを儲け出す而して恩賞賜金より生ずる利子を以て元金を償却するつまり恩賞賜金の元本を失はず又差支のなき者は毎年の利子を元へ繰込む此方法に依つて現に全村役場の金庫に保管を託されてある所の三十七八年戰役の恩賞賜金なるものは一萬九千七百九十五圓ある、それは村是の計畫以外に國にあゝ云ふ大きな戰役のあつたことを記念し又軍人の名譽を永遠に維持せしむる爲め其保護の結末を宜くした爲に增殖し得た所の村民の矢張り財產である、之等を今少し詳しく御話をしたいと思つて居りましたが、どうも時間が無いやうでありますから今日は拔きにしなければならぬ、そう云ふ風に色々の難關を經過いたして、さうして一度は破產せむとした所の一村も此の勤勞の賜物と共同一致の力に依つて總て恢復をして、今申上げたやうな工合に各種の方面に色々の餘力が出來たのであります、之れ等の事柄は今丁度世帶持ち、所謂戶主の地位に居りまする相當に年を採つた者に、此一村が困難の地位に陷つた時代の狀況を能く知つて居りまするから、其人一代は過ちはなからうと思ひますが、今の青年或は處女と云ふ者に至りましてはこう云ふ苦勞は知らぬのであります、多年幾多の辛苦を嘗めて之だけに村に目鼻が付いて參りましたけれども、之先きこの青年處女の導き方が惡いと又破壞される虞があります、折角今日まで建設し來つた所の自治團体を能く受け繼き、能く之を維持して倍々發展するやうに今の青年處女を導いて行くことは甚だむづかしいのであります、其訓練指導はどうしてもこれを敎育の力に俟たなければならぬ、斯樣に申しまするど學校の經營に何か變つた事をやつて居るやうでありますけれども、別段に變つた施設はない唯私の村に於ては一村の自治方針を學校の敎育に繫ぎ付けて役場と學校と云ふものが一体になりましてさうして二十餘年來やつて來た事柄を能く今の青年處女の頭に注ぎ込んで何所までも先輩の苦勞した事績を紀念させ再び過つ事のなきを方針として、學校敎育或は各種の敎育を行なつて居るのであります、就ては此場合少し學校敎育補習敎育等に就いて、殊に青年團体に關する御話を申上げたいと思つて居つたのであります、又郡長殿からも是非青年會に就いて話をやれと云ふ事でありましたが最早日沒になりまして時間がありませぬから是は已むを得ず拔く事に致しまするが青年會處女會婦人會の事業は學校長以下職員等が非常に力を注ぎまして其青年會は文部大臣の選奬を受けて居ります、それから斯う云ふ風に共同の事業を勸めるに就いて村の行政はどう云ふ風にやつて來たのであるかと申しまするど

是は以前の五人組制度、十人組の制度を執つて參りましたのであります、唯今で丁度十戸乃至十五戸を一組として、一組に一人づゝの組長と云ふものが付いて居るのであります、さうして其組合が私の村は五百四十三戸現住員があつて、四十四組に分れて居る、大きな組は十五人位ゐ、小さい組は十人位ゐであります、兎に角さう云ふ小組合を拵へて組長を置いてあります、其の組なるものが四つ或は五つ合せて一つの農區を拵へてありはす、其の農區と云ふものは十二區ありまして彼の鹿兒島縣に於て有名なる農家小組合と殆んど同じやうな風に出來て居る、併し彼の鹿兒島の方の小組合は其の組合毎に貯蓄組合も獨立してある基本財産もあるが、私の方のはそれとは違ふ只村治方針で定めた仕事たとへば信用組合の仕事もやる、農事改良もやる、納税の取締もやる學事の奬勵もやる凡ての方法は互ひに勵んでやると云ふ事になつて居りまして、さうして總て出來たことは區によつて優劣はあるが方針は一つになつて居ります、其の十二の農區には一區毎に村會議員一人區總代一人夫れから産業組合の信用評定産業組合委員農會の方では農事奬勵委員村の統計の方では統計調査委員が各壹人斯う云ふ機關が悉く配置してある、これ等の機關になる人は何れも資産名望のある人で、其人達は相賴相扶けて一村の仕事と勸め村民を指導するも決して報酬もいらず手當も取らず一生懸命其の組合員を卒いてさうして共に働らくのであります而して共に働いた成績を此十二の小組合が互ひに競ふて其の成績の擧るやうにして居るのであります、詰り互ひに其所屬の農區又共勵區の爲めに責任を有つて居る、

例へば税金滯納と云ふやうな傾きがあるならば其組合員の耻として、其の滯納者の無いやうにする、學齡兒童があつて其の學齡時期になつて學校へ子供を出さぬやうな者があれば其組合の耻として互ひに戒めてそれを出すやうにする、犯罪の取締も共吟味をして戒める勤勉貯蓄の實行も他の組合に後れぬ樣にする其責任を双肩に擔ふて仕事をさせて行く、總て一村の規約規定に依つて仕事をして成績が擧らなければ自分の組合の耻なりとして一般組下を督勵して居るのであります、更らに最近の村勢調査に依りまして、三十四年の村是調査の當時の額と比べまするると、三十四年の生産收入は十五万六千七百六十六圓であつたのが、四十三年には二十五万七千〇八十六圓となり四十四年は更に進んで三十万九千四百八十九圓となつたのであります、一方消費の關係を申しまするると三十四年には十四万九千三百〇五圓であつた、それには村外に支拂ふ利子、小作米なども加算してあります、其後だん〳〵負債は減し村外に支拂ふ小作米はなくなりましたけれども物價の騰貴と諸種の增加等により四十三年には二十二万三千九百五十三圓と云ふ消費額になつて居ります、即ち生産と消費を差引きまするると三十四年では七千四百六十一圓剩すことになつて居つたものが、四十三年には三万三千〇三十三圓を剩すやうになつたのであります、それで村當局者の考として殊に注意して居りますのは、先づ玆で一村の總てに稍秩序か立ち資力の方法が良くなつて參りまして、兎に角中産以上の者では大分資力が恢復して參りましたが、個人の身代と云ふものは、時に極く道息子でも出來まするると折角拵へた身代を費す虞

がありますので、是から先きは成るべく共同の財産を造つて團体の力に依つてそれを鞏固に維持する不幸にして、一人の身代は仕舞ひになりましても共同の身代は殘ると云ふ仕組にしたいと考へまして即ち基本財産の造成、それから産業組合、の資力造成或は村民だけで拵へた銀行の資力造成と此三つに依つて四十一年を根據として二十年間に五十万圓だけ是非特別の資産を造る考へでやつて居るのであります、基本財産は先刻申上げたやうな次第になつて居ります、又信用組合の方は二十年間に二十万圓造る考へであります、信用組合は昨年末の決算報告に依ると創立から四年五ヶ月で三万二千幾らと云ふ既に資力が造られて居りますから此先き利に利を重ね二十年間に二十万圓造るのは何でもないそれと村民の拵へた銀行其他特殊の團体財産を保護する、此三つで五十万圓だけは確かに出來る、土地山林其他の固有の財産と云ふものは別にして、全く此共同財産だけのものにて五十万圓を造成し不時の用に備へる積りであります、本年一月の大阪朝日新聞を御覽になつた諸君は御承知でありませうが靜岡縣の篤志家に金原明善と云ふ人があります、今年八十二歳の高齢でありますが、あの方が八十二歳の老軀を提げて新年早々から關西の各府縣を旅行された事がある、此寒空に金原先生は關西方面に何の目的で行脚をして居られたかと云ひますると斯う云ふ事を講演して歩かれたのであります、明治の御治世は誠に申分のない結構な、御治世であつたが一つ茲に瑕がある、一つの瑕とは何であるかと云ふと此結構な御治世に、二十何億と云ふ國の借金が出來た、叡聖文武なる　先帝陛下も此借金の始末には深く御軫念遊ばされた事であらうと思ふ、而已ならず國民として誠に相濟まぬ事である、どうしても是は　先帝陛下に對し奉つり現在の國債は國民が奮勵努力して償却をして仕舞はなければ何共相濟まぬのである、故に今の國民が大に勤勉努力して一人前四十圓余りの金を、是から働らき出して國債を速に償却したならば、即ち此明治の御治世に古つた一つ出來た里子、お取片付けることになる、相共々に勤勉しやうてはないかと話合つて居られるのであります、私共考へまするに私共の地方の如き寒村昨日來申上げました如き難村で、農村として土地は少なし、それから大分に先代から引續きの借金があり、誠に疲勞困難した山間の僻道でも共同の力、一致の力に依つて難關を切拔けて漸く自營獨立する事が出來るやうになり、尚ほ近き將來に於て共同の財産五十万圓以上を造り得ることが極めて確實な事になつて來たのである此点から考へまするど、まだ全國至る所を眺めて見まするど私共のやうな村は少ないのであります、多くの地方を拜見いたしまするど、かれより皆結搆な塲所で御郡の如きは尚更であるされは全國一万二千の町村を互に奮勵いたして、今の金原明善翁の述べられた如く勤勉努力致したならば二十億の國債を償却します位ゐの事は何でもない事だらうと思ふ、寒村僻邑の我が玉瀧村が五十萬圓の財産を造るのを例として全國の各町村の方々が奮勵努力せられたならば此先き二十年を俟たずして六十億の富は明らかに造り得られるのであります、即ち金原明善翁の希望を滿足なさしめる事が容易く出來やうと思います、御地へ參りまして御地の狀況を拜見いたしまする

と海に陸に各種の物産に富み、又其土地は平坦で而も廣大で實に天然の惠みを餘ほど厚く授けられて居るやうに考へますから我々地方の如き寒村僻邑とは殆と比べものにならぬのであります、私は御郡の前途に多大の望を屬しまして、此先き益々諸君の御奮勵を御願ひする次第であります、大變時間を費しまして誠に恐縮に存じます（拍手）

（宮澤彦七速記）

327
666

大正三年七月一日印刷
大正三年七月五日發行

千葉縣長生郡役所

千葉縣長生郡茂原町茂原三七三番地
印刷者　齋藤仁之助

千葉縣長生郡茂原町茂原三七三番地
印刷所　齋藤活版所

327
666

終